

平成 23 年度

史跡松山城跡

松山城本丸防災設備等整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査概要報告書

松山城本丸跡 5 次調査

松山市
松山市教育委員会

松山城本丸跡 5 次調査

所在地 松山市丸之内
期 間 平成 23 年 9 月 1 日～平成 24 年 1 月 31 日
面 積 約 148 m²
担 当 西村 直人（教育委員会事務局文化財課）

1. はじめに

1) 調査に至る経緯

本調査は、国庫補助事業「松山城本丸防災設備等整備事業」に伴う確認調査である。

松山市では、平成 29 年度までに松山城跡の防災設備を老朽化のため再整備することとしている。しかし、松山城跡は国史跡であるため、地下の遺構の保護をした上で整備しなければならないことから、遺構の遺存状況について事前に確認調査することとなった。

2) 調査の方法

今回の調査は、本丸北部の防火用貯水槽及びポンプ等の埋設予定箇所を主に対象とした。したがって、調査区はそれらに重なる位置に可能な限り小規模に設定した。なお、既存の防災施設の確認や遺構の範囲及び性格の把握にも可能な限り努め、必要に応じて拡張を行った。

2. 環 境

1) 地理的環境

道後平野は、その北東側を高縄山系の南西面に、東から南東側を四国山脈北東麓に限られ、西側の海岸線に向かって扇状に開けた沖積平野である。この沖積平野には数か所の独立丘陵が点在しており、そのひとつが右手川扇状地上にある勝山（約 132m）である。勝山は、北部の領家花崗岩類と南部の礫岩層及び砂岩層よりなる和泉層群とで構成される。調査地は、この勝山頂上にある松山城本丸跡内に位置する。

2) 歴史的環境

勝山の周辺は、発掘調査等により縄文時代から集落が営まれたことが判明している。特に城北遺跡群として多くの遺跡が確認されているが、ここでは勝山一帯の遺跡分布を中心に述べる。

【縄文時代】

東部の東雲神社遺跡では、縄文時代後期の深鉢の口縁部片が採取されている。遺構は確認されていない。

【弥生時代】

東雲神社遺跡では、祭祀跡とみられる遺構から一括性の高い弥生時代中期後葉の土器が出土している。また、「鹿」の絵を描いた土器が 1 点出土した。

西側山裾部にあたる若草町遺跡 1 次調査では、円形周溝墓 1 2 基のほか、国内でも希少な重圓日光鏡（前漢代、市指定文化財）、小型仿製鏡が出土している。

【古墳時代】

南部を中心として多くの古墳が残存している。東部の東雲神社古墳群では、横穴式石室及び箱式石棺が確認され、石室からは 6 世紀前半の須恵器ほか鉄剣が出土している。南に隣接する東雲学園古墳群も横穴式石室を主体部とした 6 世紀中頃の古墳群といわれている。また、西部の若草古墳群では 6 世紀後半の横穴式石室が 6 基確認された。

南部の城の内古墳群では、5 世紀末の竪穴式石槨及び 6 世紀後半から 7 世紀前半の横穴式石室が確認されており、竪穴式石槨からは釘や棺台といった組合式木棺の存在を示す遺物が出土している。

なお、長者ヶ平の南側尾根筋及び斜面には 10

基以上の古墳の分布が認められる。明確な時期は不明ではあるが、南下の番町遺跡から同古墳群に関連すると思われる盾形埴輪及び円筒埴輪が出土しており、その型式から概ね6世紀に収まるものと思われる。

【古代・中世】

坂の上の雲ミュージアム建設の事前調査として実施された番町遺跡では、古代の土師器や須恵器のほか、中世の土師器、黒色土器、瓦器、緑釉陶器などが包含層中から出土し、掘立柱建物と井戸が1基ずつ確認されている。また、長者ヶ平では工事中に同安窯系の青磁が出土している。

【近世】

松山城本丸跡1次～4次調査では、石組排水溝ほか整地層が確認されている。同二之丸跡では、二之丸御殿のほぼ全域が調査され、建物礎石や大井戸などが確認されている。同三之丸跡では道路、侍屋敷及び内堀が確認され、周辺の廃棄土坑（ごみ穴）からは多数の瓦、陶磁器及び食物残渣が出土している。また、番町遺跡では侍屋敷の園池、建物跡及び地下蔵跡などが確認された。園地は、一部の絵図にも描かれており、改修を受けているものの、魚溜り等おおそ原形を留めるものであった。

3. 調査の成果

調査区（トレンチ）は、10地区25箇所を設定した。各トレンチの位置、面積及び遺構検出高については、図1及び別表のとおりである。以下調査区（トレンチ）ごとに説明する。

1) トレンチ1

本丸東側石垣の水門（排水口）の真下に存在する可能性がある石組槽の確認を目的として1箇所の調査区を設定した。

遺構：整地層2層、溝（暗渠）1条、及び石垣

整地層は、第1層上面を標高約117.9mで、また、第2層上面を標高約117.5mで検出した。

溝は、方位を東西にとり、検出長208cm、検出幅68cmを測る。外側埋土（下層）の締りの強いシルト質土に比べ、内側埋土（上層）は、締りの弱

い砂質土に拳大の石が一定の密度をもって占められた状態であった。また、内側掘方内には、木質を残す釘がほぼ一定の間隔で溝の内側に向けた状態で出土した。整地層（第1層）はこの上に敷かれる。これらのことから、この溝は暗渠構造であり、内側掘方の埋土は木樋の腐食土及び崩落土で、外側掘方の埋土は木樋を固定するための裏込土と考える。

石垣は、根石を含めた4段を検出した。勾配は、下部になるほど緩くなり、根石部分では約55度を測る。石材及び積み方は、近接する築石と同じく花崗岩の打込接乱積みであり、表面は割面のままで調整は施されていない。間詰石は密に充填される。根石掘方は、地山を石垣面から97cm控えた箇所から深さ36cm掘削したもので、根石を設置した前面に非常に硬く締まる粘質土が充填され、同じ粘質土が整地層（第2面）として敷かれる。

遺物：瓦、磁器（肥前）、鉄釘

瓦の一部にコビキAが認められた。

2) トレンチ2

狭い通路の通行を妨げないよう調査を行うため、調査区を2箇所に分割した。石垣に接する西側をaとし、東側をbとした。

遺構：整地層及び石垣

整地層上面は、標高約122.7mで確認した。全体的に礫質及び砂質で、締まりはやや弱い。石垣築造当時の整地土ではなく、後代の道路面かさ上げのためのものと思われる。石垣は地表下4段半を検出したが、調査区内では根石を確認することはできなかった。勾配は、下部になるほど緩くなり、トレンチ内最下部では約55度を測る。石材及び積み方は、上部の築石と同じく花崗岩の打込接乱積みであり、表面は割面のままで調整は施されていない。間詰石は密に充填される。

遺物：瓦、陶器（肥前）、鉄釘

3) トレンチ3

墳丘状の盛土に対し縦横に4箇所の調査区を設定した。北-東L字形トレンチをa、南-西L字形トレンチをb、北西側をc、西側をdとした（図2）。

遺 構：盛土

緩い尾根上に版築状にシルト質土と砂質土を交互に重ね、基底面（礫岩風化流土）より勾配をやや急にして盛り上げたもので、全体として締まりは弱い。最も厚い中央部分は、120 cmを測る。平面形は楕円形を呈する。石室等古墳の主体部の痕跡はみられなかった。土塁の一種か。

遺 物：瓦、磁器（瀬戸）、弥生土器、中世土師器

滴水瓦が1点出土した。弥生土器や土師器は、盛土内からの出土である。なお、盛土東側裾の大規模な近代以降の攪乱坑から炭や焼土のほか被熱した瓦や土壁片が大量に出土した。

4) トレンチ4

樹木を避けて2箇所調査区を設定した。北側をa、南側をbとした。

【a】

遺 構：整地層（石垣裏込土）

標高約131.5mで確認した。ほぼ水平に砂質土とシルト質土が版築され、程よく締まる。近くの石垣天端石の標高が131.43mであることから、後世の削平をほとんど受けていないと考える。さらに、この整地層を約60cm掘り下げたが、地山（砂岩層）を確認することはできなかった。また、近現代の盛土中に円礫が数点含まれていたものの、石垣裏込石範囲の端を検出することはできなかった。

遺 物：瓦、磁器、食物残滓が出土した。

【b】

遺 構：石組溝及び整地層（石垣裏込土）〈図3〉

石組溝は、検出長204cm、溝幅41cmを測る。溝の東延長は本丸石垣東面の水口にあたる。現代の塩ビ管の施設により上部は攪乱されているものの、東面は1～2段、西面は1～3段が残る。底面は、全体的に西から東へ下り傾斜しており、最深部は深さ69cmを測る。また、大小の平坦な石が敷かれ、西端（天守曲輪側）は2段の階段状となっている。石材は、主に花崗岩が使用されているが、東端（本丸石垣側）は砂岩など別の石材が使用されている。裏込め石が認められるものの掘方

を確認できないことから、溝は整地層と同時に構築されたものとする。

整地層は、標高約131.8mで検出した。礫を多く含んだシルト質土で、先述のとおり石組溝の裏込めを兼ねる。下層は、同じく礫を多く含んだ粘土質で強く締まる。この層から近世の軒丸瓦が出土したことから、これらの整地層及び石組溝は、築城期のものでない可能性が高いと考える。

遺 物：瓦、陶器（肥前）、磁器（瀬戸）、鉄釘

5) トレンチ5

樹木及び園路を避けて1箇所調査区を設定した。

遺 構：整地層

標高約132.0mで確認した。層位は水平ではなく地山に従い東から西へ下り傾斜し、地山までの厚さは約90cmを測る。層中には大小の栗石が多量に含まれており、締りは全体的に弱い。比較的上位において20cm前後の大きめのものが多く、下位になるにつれて小さくなる傾向がみられる。石垣裏込石を廃棄のついでに整地層として使用したか、透水層を意図的に造ったかは、定かではない。

遺 物：瓦、陶器、磁器（砥部）

滴水瓦が1点出土した。

6) トレンチ6

小筒櫓の範囲確認を副目的として、絵図等を参考として寸法を割り出し、樹木及び園路を避けて調査区を3箇所に設定した。小筒櫓とは、本丸の北側にあった櫓のことで、現在その範囲は植樹され、広場となっており、その痕跡を留めるものは無い。東側をa、中央をb、西側をcとした〈図4〉。

【a・b】

遺 構：小筒櫓跡の一部（縁石抜き跡、礎石抜き跡及び整地土）及び整地層（石垣裏込土）

縁石抜き跡は、aで検出長191cm、最大幅92cm、bで検出長140cm、最大幅100cmを測り、裏込石と思われる石が一部に残る。また、縁石抜き跡の北側では、一部に厚さ約3cmの硬く締まる赤褐色粘質土の整地土が認められた。

礎石は、調査区内では確認することができな

った。礎石抜き跡は、4基を検出したが、いずれも大きさが違っており、礎石そのものの大きさは特定し難い。

遺物：瓦、陶器（肥前）、磁器（肥前）、弥生土器、漆喰

【c】

遺構：小筒櫓跡の一部（縁石あるいは石垣跡、礎石跡、整地土）及び整地層（石垣裏込土）

攪乱で大きく破壊されているものの、縁石抜き跡は検出長 140 cm、最大幅 100 cmを測る。

遺物：瓦、須恵器、陶器

7) トレンチ7

2号ポンプ室及び貯水槽拡充予定地のため、既設ポンプ周囲を対象とし、4箇所を調査区を設定した。東側をa、北側をb、南側をc、西側をdとした。

【a】

遺構：なし

遺物：瓦、炆器、磁器、鉄釘、石垣の築石

【b】

遺構：なし

遺物：瓦、弥生土器、陶器（肥前）、鉄釘

【c】

遺構：整地層（石垣裏込土）

整地層は、標高 131.2mで確認した。貯水槽等の攪乱により大きく削られていたものの、西から東に下り傾斜する。

遺物：瓦、弥生土器、鉄釘

【d】

遺構：なし

遺物：鉄釘

8) トレンチ8

中仕切門跡の範囲確認を目的とし、樹木及び園路を避けて1箇所を調査区を設定した。中仕切門とは、本丸の北側、野原櫓と先述の小筒櫓との間にあった門のことで、北へ連結する塀とともに東側（野原櫓側）からの敵の侵入に対する防備として、南の紫竹門と対をなすものとして位置づけられている。現在、その範囲は植樹され、痕跡を留めるものは無い。

遺構：仕切門跡の一部（石組溝並びに礎石及び布石抜き跡）

石組溝は、東西に軸をとり、検出長 88 cm、幅 25 cm、深さ 16 cmを測る。攪乱により破壊されているため、北側3石、南側2石を残すのみである。全て天端が同じ高さで揃っていることから、元から一段のみの構造である可能性が高い。

礎石抜き跡は主柱のものと控柱のものがあり、主柱のものは東西長 75 cm、南北長 75 cmを測る。また、主柱の礎石抜き跡の西に連結して溝状に布石の抜き跡があり、検出長 103 cm、幅 94 cm、深さ 25 cmを測る。控柱の礎石抜き跡は、石垣の隅石（出隅）付近に径約 200 cm、深さ 54 cmの土坑として検出された。なお、控柱抜き跡掘削時に切石加工された石垣隅石の根石を確認した。

遺物：瓦、陶器（肥前）、須恵器、弥生土器、漆喰

滴水瓦が1点出土した。

9) トレンチ9

新設ポンプ設置候補地周辺のため広範囲を対象とし、2箇所を調査区を設定した。東側をA、西側をBとした。

【a】

遺構：整地層

標高約 101.6mで確認した。地山の上に直接敷かれており、厚さ約 20 cmを測る。地山が下り傾斜する北端では、平坦面を保つためと考えられる拳大の石が敷かれている。南側は、現代のトイレ建設により破壊されている。絵図ではこの辺りに材木小屋が描かれていることから、これに伴う整地層かも知れない。

遺物：瓦、磁器

【b】

遺構：整地層

標高約 103.2mで検出した。自然地形の谷部を地山と同じ砂岩のシルト質土を使用して埋めている。上位は多くの攪乱により破壊され最終整地面は無いものの平坦面の造成に伴う整地層と考えられる。

遺物：瓦

10) トレンチ10

3号ポンプ室及び貯水槽拡充予定地のため、既設ポンプ周囲を対象とし、4箇所を調査区を設定した。北東側をa、南東側をb、北西側をc、南西側をdとした。

【a】

遺構：整地層及びピット3基

整地層は標高約131.4mで検出した。最終整地面にはキメの細かい真砂土が使用されており、弥生土器が包含されている。周辺の地山は砂岩あるいは礫岩であることから、客土であることは間違いないが、近世の整地層であるかは不明である。下層は礫交じりの砂質土である。

遺物：瓦、弥生土器

【b】

遺構：なし

遺物：弥生土器

1本

【c】

遺構：整地層

標高130.9mで検出した。貯水槽関連の攪乱で大きく破壊されており、西端にわずかに確認した。調査区外西側（石垣側）には広く残存する可能性が高い。黄色のシルト質土で、キメが細かく締まる。

遺物：瓦

【d】

遺構：整地層及びピット2基

整地層は標高約131.4mで検出した。黄褐色の砂質土で、礫を少量含み締りはやや弱い。

遺物：瓦

4. 小 結

今回の調査は、冒頭で記したように、本丸跡に遺存する江戸期遺構の有無の確認を目的に実施した。結果、ほとんどの調査区（トレンチ）で遺構を検出したが、本丸の機能上、生活関連の遺構は及び遺物は無く、本丸築城及び修理に伴う遺構を多く確認することができた。特に、これまで正確な位置及び範囲が不明であった小筒櫓及び中仕切門のおおよその位置を確認できたことは成果であ

る。また、整地層や盛土などの各種の土木遺構を確認できたことは、本丸の縄張りや工事の過程を知る上で意義深いと考える。しかしながら、今回それらの一部しか調査することしかできず、遺物をあまり取得できなかったため、造成時期について明確にできなかったことは、反省すべき点である。唯一、トレンチ4bの石組溝が築城時のものでないと判明したことが、僅かながら成果であろう。また、滴水瓦3点がそれぞれ違う調査区から出土したことは、本丸建物の構造を考える上で新たな知見である。

最後に、今回その一部の遺構を検出することができた「小筒櫓」について述べておきたい。

小筒櫓は、様々な絵図にその姿が描かれている。例えば、『松山城下町宝暦図』（1751-1763）では南側に戸口のある千鳥破風をもった二重櫓が描かれており、『松山城図（亀郭城秘図）』（1854）では西側に付櫓をもち、縁石（低い石垣）が巻かれた二重櫓が描かれている（資料1・2）。また、文書資料では櫓の寸法並びに戸口及び窓の位置が記されている（なお、文中では「中櫓小筒預」と記される）（資料3）。

一方、今回の調査では、縁石及び礎石の抜跡並びに整地土を検出した。調査成果と絵図及び文献の寸法を照合してみると、縁石の位置、礎石の位置ともに概ね合致している。また、戸口の建物内と推測される部分には、硬い整地土が良好に残っている。踏まれる頻度が高いため硬質となり、残存したのであろうか。

※寸法については、全て一寸=3.03cm、一尺=30.3cm、一間=六尺五寸=196.95cmとして換算した。

【参考文献】

- 1 「松山城」編集委員会編1984『松山城 増補四版』松山市観光協会
- 2 松山市史料集編集委員会編1988「松山城下町宝暦図」『松山市史料集』第一三巻付図 松山市役所
- 3 松山市史編集委員会編1993「松山城図（文久期）」『松山市史』第二巻付図 松山市役所